

原著論文

朴澤三代治と裁縫教授用掛図

佐藤 和賀子

Wakako Sato: Miyoji Hozawa and His Wall Charts for Teaching of Sewing. Bulletin of Sendai University, 44 (2) : 59-71, March, 2013.

Abstract: This paper discusses the role of wall charts as a teaching aid in the Meiji era sewing school, Shoso School. Shoso-Shi Juku was established in Sendai by Miyoji Hozawa in 1879. It was renamed Shoso School in 1884. In 1881, Tatsugoro Watanabe established Wayo-Saiho Denshujo. Hozawa and Watanabe are regarded as the leaders in sewing education during the Meiji era.

During the Edo era, sewing was taught privately. However, due to the educational reforms of the Meiji era, sewing was taught to groups. Hozawa and Watanabe sought to develop new teaching methods suitable for new circumstance. Previous studies indicate that Hozawa developed wall charts and Watanabe designed miniature kimonos, "Hinagata".

Hozawa's wall charts are open to further study. The wall charts were used in exhibitions in addition to their role as teaching aids. The miniature kimonos were pasted onto cardboard for ease of transport. These boards are called "Kakezu".

Official documents from the Meiji era credit Hozawa with development of a new method using "Hinagata". Miyoji Hozawa's use of "Hinagata" and the wall charts promoted sewing education and he played a major role in women's education during the Meiji era.

Key words: Shoso School, Hinagata, Tatsugoro Watanabe, group lesson

キーワード: 松操学校, 雛形, 渡邊辰五郎, 一斉授業

I. はじめに

初代朴澤三代治(以下、「初代」を略す)(1823～1895)は、明治12年(1879)に裁縫塾「松操私塾」を仙台区良覚院丁一番地(現、仙台市青葉区一番町二丁目)に創設した。朴澤三代治は、明治14年(1881)に東京本郷に「和洋裁縫伝習所」(現、東京家政大学)を開いた渡邊辰五郎(1844～1907)と並び、明治時代の裁縫教育の双壁として評価されている。江戸時代の裁縫教育は「お針の師匠」等によって個人教授でおこなわれた。明治以降、近代的な教育制度が導入されると、裁縫教育は従来の個人教授

から教室での一斉授業になり、それに適した教授法が求められた。朴澤三代治と渡邊辰五郎は一斉授業に適した教授法として、朴澤は掛図、渡邊は雛型に特徴があると、裁縫教育史でその業績が位置づけられている。本稿では、朴澤三代治の掛図に焦点をあて、掛図に見られる裁縫技術の分析ではなく、掛図という形態に注目し、朴澤三代治の裁縫教育における掛図の役割を考察する。

II. 朴澤三代治のおいたち

最初に、三代治の生い立ちを公文書に残る履

歴書等に依拠して、本稿に関連する必要な事柄を中心に略述する。

三代治は文政6年(1823)に生まれ、少年時代には仙台藩校養賢堂で学び、青年時代には伊藤養齋から軍学・軍服裁縫を、菅原一二三から官服裁縫の伝授を受けた。明治維新によって多くの士族は生活の糧を失った。しかし、当時40代であった三代治は仕立業と裁縫教授を生業としていた。

明治5年(1872)の学制公布後、女子にも学校教育の道が切りひらかれたが、女子就学率は低く、その打開策として小学校に裁縫科が設置された。明治9年(1876)以降、仙台区の培根小学校(現、仙台市立木町通小学校)や琢玉小学校(現、仙台市立立町小学校)などに裁縫科が付設された。三代治は明治10年(1877)に仙台師範学校の裁縫科教師となり、師範学校女子部が閉鎖される明治17年(1884)まで務めた。この間、明治12年(1879)に三代治は「松操私塾」を創設した。明治17年には県の認可を受けて、校名は「松操私塾」から「松操学校」に改称された。松操学校は小学校裁縫専科教員を養成する学校として県内外から生徒が入学した。当時の日本は明治16年(1883)に建設された鹿鳴館を舞台に華やかな鹿鳴館外交が展開されていた。一方、大蔵卿松方正義のデフレ政策の下、農村は窮迫し自由民権運動もその影響を受け、明治17年には群馬事件、加波山事件、秩父事件等の激化事件が相次ぎ、社会不安が広がった。明治以降、没落する士族も多く、松操私塾で学んだ士族の女性の中には自活の道を選ぶ者もいた。仙台藩士の娘の例をあげると、戊辰戦争の責を引きうけ刑死した坂英力の娘坂こうは母校に残り裁縫教師となり、天文学者戸板保佑を祖先にもつ漢学者戸板善内の娘戸板せきは、上京して裁縫学校(現、戸板女子短期大学)を創設した。

三代治は生徒作品や自作教具を国内外の博覧会に積極的に出品して賞を得て、校名を高め、裁縫教育者として女子教育に大きな足跡を残し、明治28年(1895)に死去した。

Ⅲ. 裁縫教育と掛図

1. 基本用語の確認

本論を進める前に、明治期の裁縫教育を論じる時の基本用語である「部分縫」「雛形」「掛図」について確認したい。江戸時代の裁縫教育は個人教授による技術の模倣が主で、難しい部分は師匠が自ら手をくたすこともあり、技術の習得に時間がかかった。明治になると教場での一斉授業に適した指導法が裁縫教育にも求められ、「部分縫」「雛型」「掛図」による教授法が工夫された。「部分縫」とは裁縫の急所である襟、袖、襟などの技術を要する部分を取り出し、1枚の着物を総合的に縫う前にその準備として、難しい部分の縫い方を練習することである。「雛形」とは縮尺模型のことである。「雛形」は完成品全体の縮尺模型だけではなく、朴沢学園所蔵の掛図には袖等の部分縫の雛形、鋏で裁つ部分に線(罫)を引いた布地の雛形(罫引雛形)、鋏等で裁ち切られた布地の雛形(裁切雛形)が貼付されている。雛形教育の第一人者と評価される渡邊辰五郎の裁縫雛形について、渡辺学園ではその教育効果として次の3点を挙げている。1. 布地と時間の節約になり、短時間で多種多様な衣服・生活用品を製作できる、2. 服作りの全ての工程を1人で行えるようになる、3. 細やかな仕事が必要とされ、技術の向上になる¹⁾。

「掛図」は「学校の教室で黒板ないし壁面に掲げて教授に使用した比較的大判の絵図や表など」²⁾である。吉良僕氏の論文では「明治初年には掛図、懸図、掲図の三字が使用されている」³⁾とある。宮城県の公文書「明治七年明治八年小学校関係綴」では「掛物」の名称もみられる。

2. 先行研究の検討と本論の視角

朴澤三代治の裁縫教育について論述している主要な先行研究を本論の視角から検討する。

常見育男氏は著書『家庭科教育史』のなかで朴澤三代治と渡邊辰五郎の教授法を「部分縫による教授は主として松操女学校の設立者、仙台的朴沢三代治が最も力を注いで実施した仕方であり、雛形による教授は東京の渡辺辰五郎が工夫した仕法である」⁴⁾と述べている。常見氏の

著書では掛図は等閑視され、明治前期に製作された掛図の名称を紹介するに留まる。三代治の掛図として明治7年(1874)製作の「衣服掛図」を記しているが、この掛図は朴沢学園所蔵資料の中に現時点では含まれていない。

関口富左氏は著書『女子教育における裁縫の教育史的研究—江戸明治両時代における裁縫教育を中心として—』『尋常師範学校における教科書』(第11章第3節)で三代治の『裁縫教授書』(正確には『裁縫教授書壺』)に言及している。朴澤三代治が著した3冊の裁縫教授書『裁縫教授書壺』『裁縫教授書全』『小学裁縫教授書』(以下、3冊を総称する場合には『裁縫教授書』と記す)にある掛図の記述は「衣服名称」「織地名図」に関するものである。そのなかで関口氏は「衣服名称」のなかの「暗射衣服図」に注目している。暗射衣服図を説明すると、地名が書かれていない白地図のことを暗射地図というが、これに倣い、「暗射衣服図」とは衣服の形

だけが描かれて、衣服の各名称が書かれていない図のことである。関口氏は「(衣服の)各名称を暗記させ、教師が各名称を鞭で射し、答えさせようと案出したもの」「要は、記憶させ反復させ、衣服の名称を覚えさせるという指導法で、この掛図は朴澤が最初に考案した」⁵⁾と評価している。「松操学校之図」(図1)には教場で朴澤三代治が「暗射衣服図」を棒で指している姿が描かれている。渡邊辰五郎の教授法の特徴は雛形と一般に言われているが、渡邊辰五郎著『たちぬひのをしへ まきの一』の口絵には掛図を用いた一斉授業の様子が描かれている。

次に、朴澤三代治について言及している論文をみると、樋口哲子氏は「わが国における被服教育発展の様相(第1報)明治期の裁縫教授法(1)」のなかで、渡邊辰五郎については「雛形製作の後、実物製作に移る方法は氏の特徴」⁶⁾と記し、朴澤三代治については「運針、基礎縫い、部分縫いなどの基礎技術を重視し、中でも部分

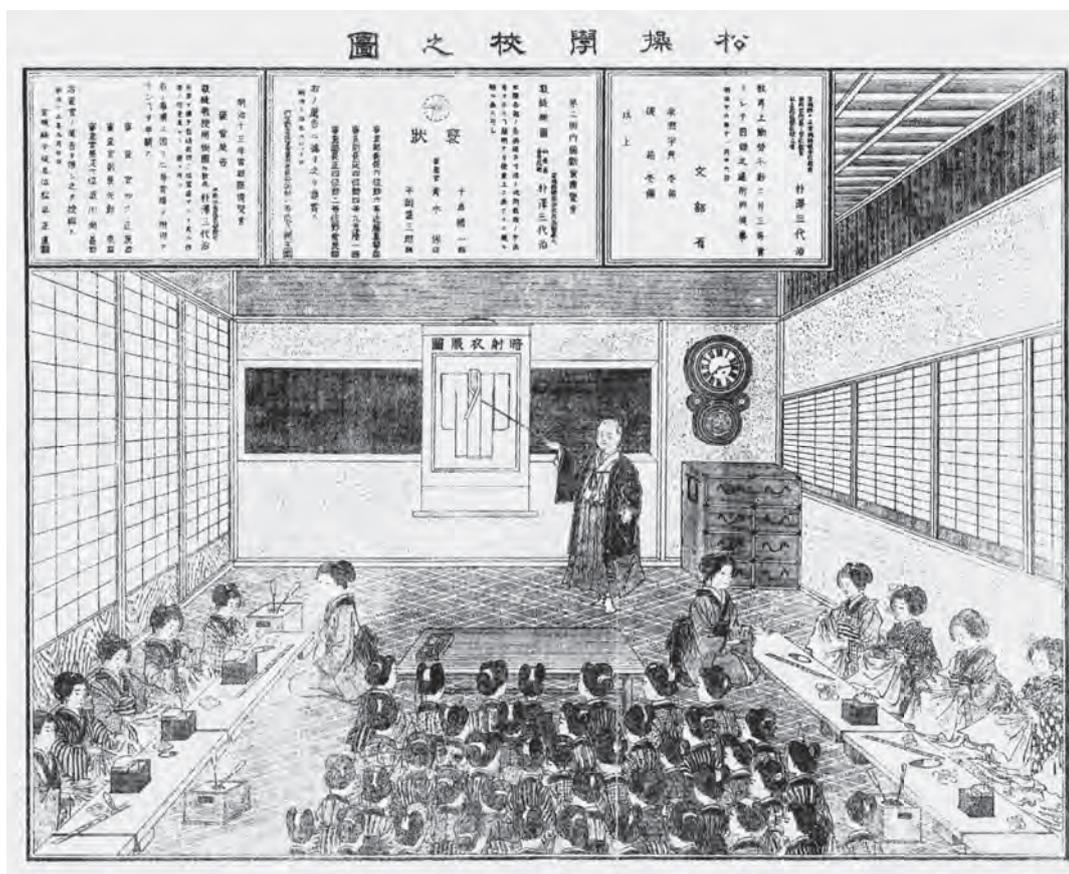


図1 松操学校之図

縫いによって部分の技法を理解させ、後、統合して実地縫いをする方法は、氏の特徴⁷⁾としている。しかし、渡辺学園の研究では、部分縫いは朴澤三代治のみならず、渡邊辰五郎も重視した指導法であることを指摘している⁸⁾。樋口氏は掛図については「朴沢・渡辺両氏とも教便物を用いて教授過程を整理し、一斉教授を可能としたが、当時の教授法が、庶物指数、開発主義を背景とし、実物による直感教授が唱えられ、それに代わるものとして掛図が用いられた。朴沢氏は、特に掛図の案出において広く貢献した⁹⁾と記している。

朴澤三代治を単独で扱った論文には千葉昌弘「明治初期宮城県の女子教育と（初代）朴沢三代治」（『仙台大学紀要』第8集、1976年）と植村千枝「家庭科教育における技能・技術（2）—初代朴沢三代治の裁縫教育とその周辺—」（『宮城教育大学紀要』第20巻、1985年）がある。

本稿のテーマに関係がある植村氏の論文をみると、植村氏は朴沢学園の掛図を実際にご覧になり、掛図にたくさんの雛形が貼付されていることに驚き、疑問を抱かれている。植村氏の疑問とは、従来、雛形は渡邊辰五郎の教授法の特徴であると言われているが、朴沢学園の掛図に雛形が多いことを意外に思われたのであろう。植村氏の論文は三代治の裁縫教育について多角的に論じた論考であり、掛図に雛形が多い点に関しては、三代治が博覧会に積極的に参加していることに触れ、「縮尺にしる実物貼付が多いのは枚数に限界があったと考えられる¹⁰⁾と記すにとどめている。

従来の研究では、「雛形」は渡邊辰五郎の教授法として強調され、一方、朴澤三代治は掛図教育では注目されているが、掛図に貼付されている雛形には関心が向けられなかった。植村氏は掛図に関しては朴沢学園側の資料で分析されているので、本稿では明治期の公文書も参考に掛図と雛形との関係を調べ、三代治の裁縫教育における掛図の役割を考察する。

3. 明治初期の掛図

明治期の教育掛図について主な研究をみると、吉良僕「明治の視覚文化と教育—掛図の

変遷—」（『熊本大学教育学部紀要』第16号、1968年）、佐藤秀夫・中村紀久二編『文部省掛図総覧』（1986年、東京書籍株式会社）、貴重な多数の教育掛図を所蔵している玉川大学教育博物館（東京都町田市）編集・発行の『掛図にみる教育の歴史』（2006年）等がある。この3点には裁縫掛図についての記述はないが、これらを参考に明治初期の教育掛図について略述しながら、三代治が掛図を製作するヒントをどこから得たのかを考察する。

欧米では19世紀中葉以降に紙の機械生産が可能になるまで、教育現場では教科書よりも掛図が教材として盛んに用いられた。わが国では明治5年（1872）に学制が公布され、同年、教師養成のために東京に設置された官立師範学校に、大学南校の英語教師であった米国人マリオン・スコット（Marion McCarrell Scott, 1843～1922）が招聘された。スコットはアメリカの教育をモデルにした近代的な教育を紹介し、掛図を使った一斉教授法を伝授した¹¹⁾。明治6年（1873）に東京師範学校はアメリカで刊行されていたチャートをもとに「五十音図」「単語図」「連語図」等を製作した。翌7年（1874）に師範学校編集刊行の掛図が改版されるのを機に、編集・刊行者が「東京師範学校」から「文部省」に改められた。当時の教科書は手漉き和紙で高価であったため全員が所持できず、明治10年代頃まで教科書よりも、掛図が小学校の主要な教材であった。明治19年（1886）から明治36年（1903）までは検定教科書時代であり、教科書の編集発行が民間に委ねられていた。この期間には民間発行の掛図も盛んに製作された。掛図の位置付けは、明治初期には教科書と同一であり、明治検定教科書時代には教授用図書へと変わっていった。

明治初期の掛図は「伊呂波図」・「五十音図」・「数字図」などは木版墨刷りであり、「連語図」は木版色刷りの絵が貼付されていた。形態をみると1枚物の掛軸形式で、複数枚が綴じられた形ではなかった。吉良氏は「スコットの指導があったにしても、掛図は、まず、日本古来の掛軸の様式を踏襲したものであった¹²⁾という指摘は的を射たものであろう。

三代治が出品した明治13年(1880)宮城県博覧会の出品目録には「織物名付掛物」「裁縫図等掛軸」¹³⁾の記載があり、「掛物」「掛軸」の二通りの名称がある。明治13年現在では「掛図」という名称はまだ一般的でないことがわかる。「掛物」は下に軸木のないもの、「掛軸」は下に軸木があり巻けるもの、と分類していたのであろうか。翌、明治14年(1881)第二回内国勸業博覧会の出品目録では「裁縫用掛図」とあり、掛図の名称が使用されている。三代治の『裁縫教授書』の挿絵には、下に軸木がついた掛軸形式の「木綿織地名称図」が掲載されている。

4. 朴澤三代治編纂の掛図

平成23年(2011)7月1日、「朴沢学園裁縫教育史料 附課題研究提出物等一括」は「仙台市指定有形文化財」に指定された。指定を受けた資料は、掛図類352点、教科書等の書籍36点、課題研究提出物161点、高等師範科第三学年研究会記録8点の計557点である。掛図のなかで、初代朴澤三代治編纂とされるのは、「衣服名称」掛図8枚と「伝 内国勸業博覧会出品掛図」33枚の41枚である¹⁴⁾。数はいずれも現在所蔵の枚数であり、製作時点での全数は不明とされている。

上記の掛図のなかで製作年を特定できるのは「衣服名称」掛図である。縦書きで掛図の右上に「明治十四年十二月十九日御届 明治十五年

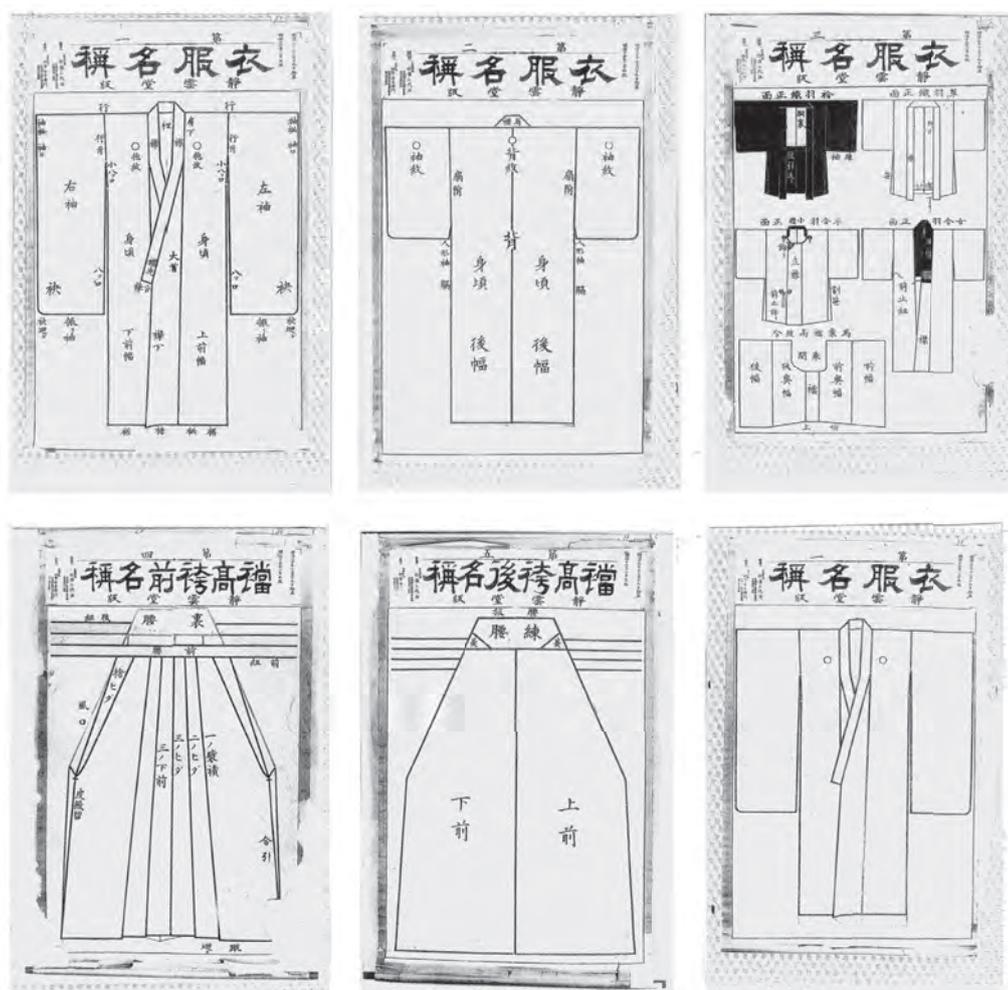


図2 「衣服名称」掛図

一月出版」, 左上に「製図人宮城県土族朴澤三代治宮城県下陸前国仙台区良覚院町一番地 出版人同県平民伊勢安右衛門宮城県下陸前国仙台区国分町五番地」, 横書きで「静雲堂版」と記されている。この掛図8枚には第一から第五まで番号が上部に付されている。しかし、図柄は異なるが同一番号のものが3組あり、また、図柄は同じであるが番号が異なるものが2組ある。この整然としない6種8枚の番号を解決する手掛かりがある。この掛図出版から10カ月後に、木村敏編輯『小学始教』が同じ版元の静雲堂から出版されている。その中に「衣服名称」掛図の6枚が転写され、順に番号がついている。それによると「衣服名称第一」(着物前身頃)、「衣服名称第二」(着物後身頃)、「衣服名称第三」(単羽織正面, 袷羽織正面, 女合羽正面, 半合羽小襟正面, 馬乗袴高縫合)、「襠高袴前名称第四」, 「襠高袴後名称第五」とある。現存する「衣服名称」掛図では「第一」と書かれた2枚の中の1枚が『小学始教』では「暗射衣服図第六」として順に並べられている。現存資料の番号に重複がみられる理由を推察すると、1枚ごとの図には元々番号は無く、使用目的に応じて番号を

つけて自由に組合せて使用したと考えられる。なお、明治17年(1884)発行の三代治の『裁縫教授書』には衣服名称図が、『小学始教』の挿絵と同じ順番で掲載されている。三代治の『裁縫教授書』には「第一号より第五号迄を掛図となして教場の正面へ掲げ以て各部の名称を教へ又此図に出だせし外にも教示しおくべき名称もあれば此分ハ別て丁寧ニ教へ置くものとす但し試験の節ハ暗射図を用ひ暗射図なきときハ之を塗板に画きて暗射掛図に代用すべし」¹⁵⁾とある。塗板とは黒板のことである。

製作年が推定できる掛図は「伝 内国勸業博覧会出品掛図」にある。オリジナルの出品数は不明であるが、現存する33枚のうち、「凡例」「教授用結物見本」の2枚には「明治二十三年一月初五」と記され年代が特定できる。「凡例」には「本校出品中第一号ヨリ第五号ニ至ル表題ヲ教授用雛形一式ト命名セリ」とあり、「凡例」には「第一号素縫切之部」, 「第二号雛形罫引及雛形裁切之部」, 「第三号毛糸編物之部」とある。学園所蔵掛図のなかには2枚の表題掛図があり、「第一号 私立松操学校裁縫教授用 雛形一式 素縫切之部」, 「第二号 仙台私立松操

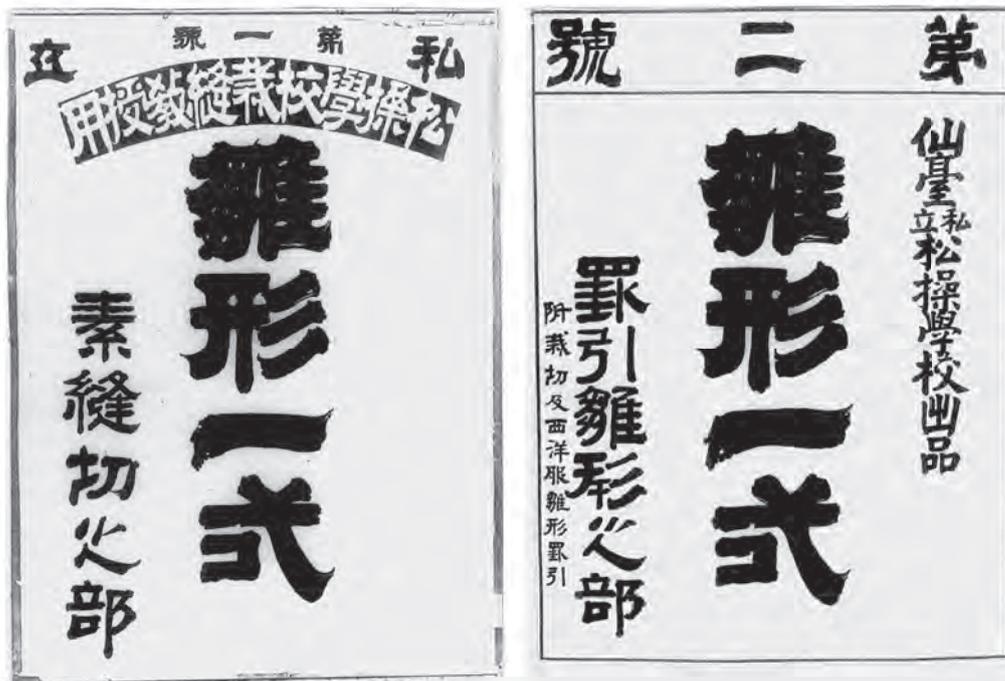


図3 「伝 内国勸業博覧会出品掛図」表題掛図

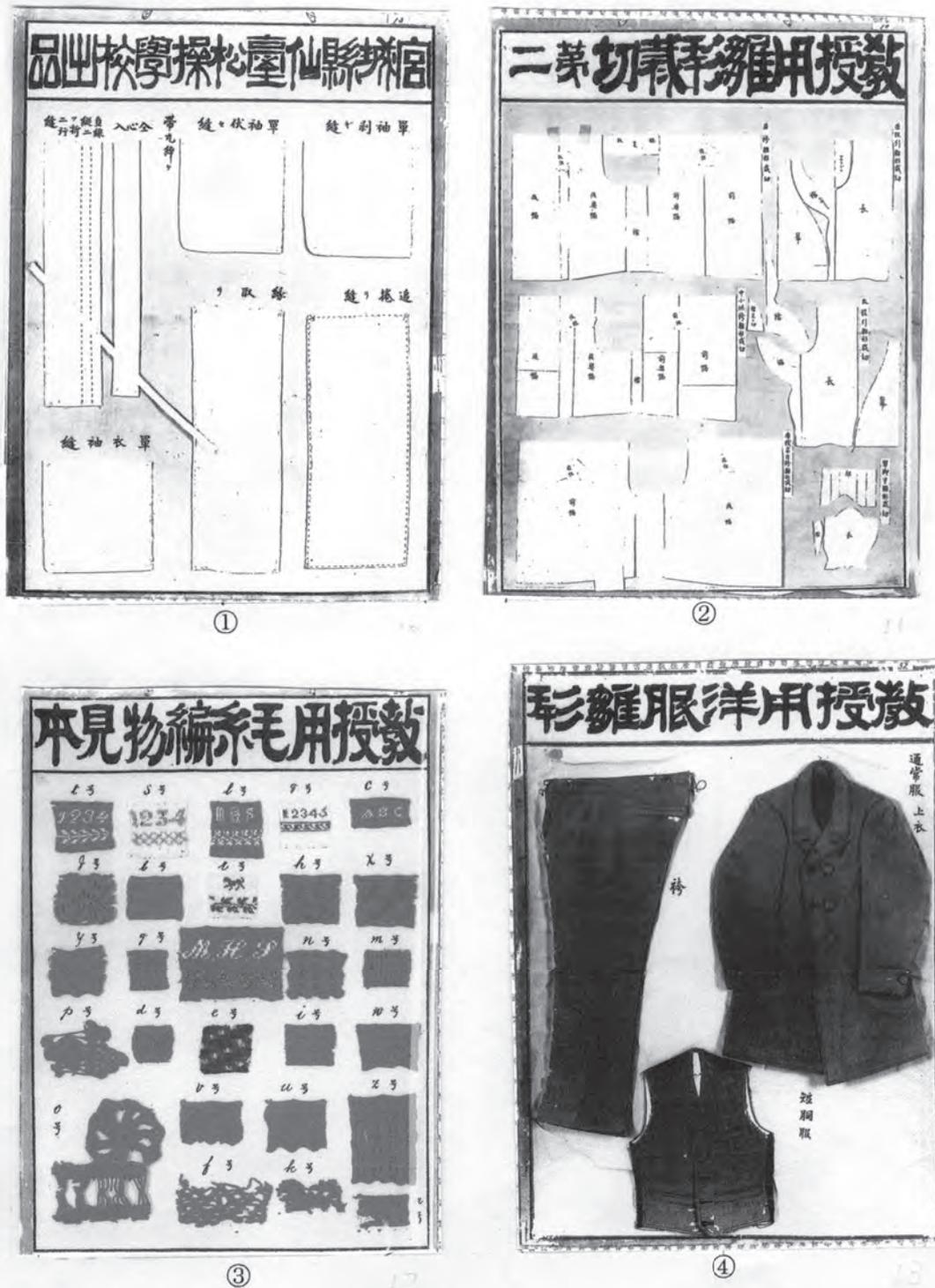


图 4 「伝 内国勸業博覧会出品掛図」

学校出品 雛形一式 罫引雛形之部 附裁切及西洋服雛形罫引」がこれらに相当するが、第三号から第五号の表題掛図は現存しない。

『朴沢学園裁縫教育資料集第1号』（以下、『資料集』と略す）には「伝 内国勸業博覧会出品掛図」33枚の写真が掲載されている。『資料集』所収の「朴沢学園裁縫教育資料展」関係資料では「凡例」を参考に掛図を第1号から第5号に分類している。『資料集』では記号で分類されているので、内容で表記すると以下の通りである。

第1号 素縫切之部 7枚

- ・第一号 私立松操学校裁縫教授用 雛形一式 素縫切之部
- ・縫取雛形、実物貼付（5枚）
単袖剥ぎ縫他（図4-①）、串縫他、
裕前縫他、単羽織袖縫他、綿入前縫他
- ・蒲団雛形、実物貼付

第2号 雛形罫引き及び雛形裁切の部 8枚

- ・第二号 仙台私立松操学校出品 雛形一式 罫引雛形之部 附裁切及西洋服雛形罫引
- ・三ツ身裁方雛形罫引他、実物貼付
- ・半合羽仕立上り雛形罫引他、実物貼付
- ・着物袴縫合雛形罫引他、実物貼付
- ・教授用雛形裁切第一 半合羽雛形裁切他、実物貼付
- ・教授用雛形裁切第二 並袴雛形裁切他、実物貼付（図4-②）
- ・背広洋服罫引雛形
- ・西洋服表裏雛形図 仕立上之図

第3号 毛糸編物の部 3枚

- ・教授用編物雛形 第一
- ・教授用編物雛形 第二
- ・教授用毛糸編物見本（図4-③）

第4号 飾縫い、結物 3枚

- ・飾縫之部
- ・教授用結物見本（2枚）

第5号 洋服雛形 2枚

- ・教授用洋服雛形 袴、通常服上衣、短胴服（図4-④）
- ・教授用洋服雛形 洋服前縫

その他、姿勢検体人体図、布地見本 5枚

- ・洋服裁縫教授用身体図

- ・躯体尺度濃教授掛図
- ・織地名称図（3枚）

『資料集』では以上の28枚と共に、次の5枚を「伝 内国勸業博覧会出品掛図」としている。

1. 凡例
2. 宮城県仙台私立松操学校規則摘要
3. 私立裁縫松操学校規則摘要
4. 裁縫教授用身体図
5. 三代治が発明した上懸（布を引っ張る金具）の説明文と使い方の挿絵入り掛図

次に、学園所蔵の掛図と三代治著『裁縫教授書』との関係を記す。「仙台市指定有形文化財」の「指定対象一覧」のなかに「縫取見本掛図」6点がある。『裁縫教授書』で説明されている縫い方の幾つかは、「縫取見本掛図」の中にもある。たとえば、『裁縫教授書』9頁の「護縫」は、「縫取見本掛図」第1号で「守り縫」の名札が付いて実物が貼付されている。『裁縫教授書』19頁の「五行留及六行留」は枕等の端を留める縫い方で説明文と挿絵があり、一方、「縫取見本掛図」第6号にはこの雛形が貼付されている。「伝 内国勸業博覧会出品掛図」には洋服や毛糸編物に関する掛図があるが、『裁縫教授書』には洋服と編物に関する記述はない。掛図「衣服名称」の6枚が『裁縫教授書』の挿絵になっていることは前述の通りである。

5. 三代治と師範学校の人脈

三代治は師範学校に関わる人々と豊かな人脈を築いているので、論を進めるために必要な点に絞り、師範学校の歴史を略述する。

明治5年（1872）の学制公布後、小学校が急増し、それに伴い小学校教員の養成が急務となった。明治6年（1873）には官立宮城師範学校が設置され、初代校長に大槻文彦が任命された。師範学校の第1回卒業生に木村敏がいた。東二番丁小学校訓導になった木村は、簡易な教員養成学校の設立を説き建議書を県に提出した。これが県に受け入れられ、明治8年（1875）に下等小学校の教員養成を目的に小学校教員伝習学校が設けられ、東二番丁小学校訓導兼務のまま木村が校長に任命された。県は教員の学力

向上のために、明治9年(1876)に上等科を設置し、校名を仙台師範学校と改めた。仙台師範学校は、明治11年(1878)に廃止された官立宮城師範学校の校舎等を譲りうけ、明治12年(1879)に県立宮城師範学校と校名を改め、さらに、明治19年(1886)には宮城県尋常師範学校と改称した。

この間、師範学校の女子部は、仙台師範学校時代の明治10年(1877)に設置されるが、明治17年(1884)には廃止された。女子部が再設置されるのは宮城県尋常師範学校時代の明治22年(1889)である¹⁶⁾。三代治は明治10年に師範学校に女子部が設置されると、仙台琢玉小学校(現、仙台市立立町小学校)の裁縫科助教を兼務のまま裁縫教員に迎えられ、女子部閉鎖までつとめた。この間、朴澤門下の甲田みどり、志賀知子、若柳左長等が勤務期間の長短はあるが助教・助教補として勤務し、三代治を補佐している。

師範学校時代の教え子のなかには、仙台培根小学校で裁縫科助教として既に教職にあった新妻瀧代がいる。新妻は自己の再教育の場を求めて女子部に入学したのであろう。

三代治と師範学校の人脈をみると、明治17年(1884)に出版された三代治の3冊の『裁縫教授書』の最初の頁には宮城県令松平正直が寄せた「針・端・奪・化・工」の5文字が掲載され、それに続く序文は和久正辰撰・中川父寛書である。和久は宮城師範学校長、中川は同校の書道教師である。師範学校時代の人脈は三代治が師範学校を辞した後も続き、明治20年(1887)に三代治は松操学校の教則に男女洋服及び唱歌の副学科を加えることを願い出て県から受理された。唱歌の講師を依頼された四竈仁邇は文部省音楽取調所で学んだ師範学校の若き音楽教師であった。四竈は昭和15年(1940)まで学園の教壇に立ち、その間、校歌の作詞作曲を手掛け、この校歌の制作年は不明であるが昭和34年(1959)に新しい校歌になるまで歌われた¹⁷⁾。

木村敏と師範学校との関係、木村の著書『小学始教』と「衣服名称」掛図との関係は既述の通りである。明治27年(1894)に三代治が藍

綬褒章を授与されたのを機に、卒業生と生徒によって建立された頌徳碑の撰文は木村敏によるものである。

三代治は天保3年(1832)に仙台藩の藩校養賢堂に入り読書・習字・小笠原礼法を学んでいるが、官立宮城師範学校の初代校長大槻文彦の父は、幕末に養賢堂学頭をつとめた大槻磐溪である。大槻文彦は日本で最初の近代的な国語辞典と評される『言海』を執筆し編集した国語学者として著名であるが、明治16年(1883)には「新撰日本暗射全図」を大阪で出版している。これより前の明治10年(1877)には飯島半十郎編著「日本暗射地図」が文部省で作成されているのが確認できる。三代治が明治15年(1882)に出版した掛図「衣服名称」には着物前身頃の暗射図がある。三代治が暗射地図からヒントを得て暗射衣服図を作製したと仮定すれば、暗射地図を勤務先の師範学校で見た可能性は否定できない。

明治初期の宮城県の中高等教育機関として明治7年(1874)に官立宮城外国語学校が設置され、創立後すぐに宮城英語学校に改称し、明治10年(1877)まで存続した。明治10年に宮城英語学校の教場・書籍・器械をすべて譲りうけ、県立仙台中学校が発足した¹⁸⁾。明治5年(1872)に東京に師範学校が設置された時、英語教師スコットの通訳をつとめたのが坪井玄道である。坪井は明治8年(1875)に宮城英語学校の教員として赴任し、宮城英語学校が閉校後は仙台中学校に明治11年(1878)まで勤務した¹⁹⁾。その後、坪井は女子体育の発展に貢献した²⁰⁾。「伝

内国勸業博覧会出品掛図」のなかには、毛糸作品の雛形を貼付した掛図があり、作品ごとにab～の記号が付けられている(図4-③)。三代治は「凡例」のなかで、アルファベットが進むほど製作の難度が上がることを説明している。この例から、三代治が英語に関心があったことは推察できる。しかし、三代治と坪井玄道との直接的な接点を示す資料は未見である。

6. 朴澤三代治の3冊の『裁縫教授書』

明治17年(1884)に三代治は『裁縫教授書壱』・『裁縫教授書全』・『小学裁縫教授書』(以下、必

要に応じて『巻』『全』『小学』と略す)の3冊の『裁縫教授書』を出版している。3冊の『裁縫教授書』の表紙見返しには「宮城県師範学校裁縫教員朴澤三代治編輯 小学中等科裁縫教授書 仙台書林 楽善堂発兌」とある。奥付には「明治十七年四月八日版權免許 同十七年九月廿日出版 編輯人宮城県下陸前国仙台区良覚院丁一番地宮城県土族朴澤三代治 出版人同県下同国仙台区大町五丁目六十六番地同県平民大内源太右衛門 発兌人同県下同国仙台区国分町五丁目六十九番地同県平民高橋藤七」とある。なぜ、内容のほぼ同じ著書が同時期に3冊出版されたのであろうか。なお、国立国会図書館近代デジタルライブラリーの『裁縫教授書』の書名で閲覧できるのは『裁縫教授書巻』である。論文や研究書のなかでも『裁縫教授書』と一括され、その違いに言及していないので、本稿ではこの3冊を比較したい。

3冊の内容はほぼ同一であるが相違点もある。相違点の1つは『小学裁縫教授書』のみに「宮城県仙台区元荒町松操学校朴澤三代治」・「規則教場之図」・「改良服教場之図」の3枚の図が1枚に大きく構成された折り込み図がある点であ

る。各図の題名はローマ字でも表記され、かつ、学校所在地には日本語表記にはないNIPPONが付記されて、海外向け学校案内パンフレットの役目を果たしている。明治17年9月25日付『奥羽日日新聞』は、松操学校がニューヨークで開催される教育博覧会へ出品することを知らせ、出品物のなかに掛図、校舎の図面と写真、生徒作品と並んで書籍一卷とある。この書籍が『小学裁縫教授書』であろう。図5の「規則教場之図」に描かれている掛図3枚はいずれも朴沢学園に現存する。左と中央の掛図は「衣服名称」掛図にある2枚である(図2参照)。右は「裁縫教授用身体図」の掛図で羽織袴の3人の男性「肥大ナル人」「前屈ノ人」「後傾ノ人」が描かれている。図の正面には柱時計がある。『裁縫教授書』では迅速な縫い方として、1枚の着物を分担して30分から40分で仕立てる「組縫」を紹介しているので、時計も教具の1つであった。「改良服教場之図」からは、生徒がテーブルに向い椅子に腰かけ、ミシンやアイロンを使用しているのがわかる。『裁縫教授書』の刊行から3年後の明治20年(1887)、三代治は洋裁教師若村ゑいを東京から招聘している。安政5

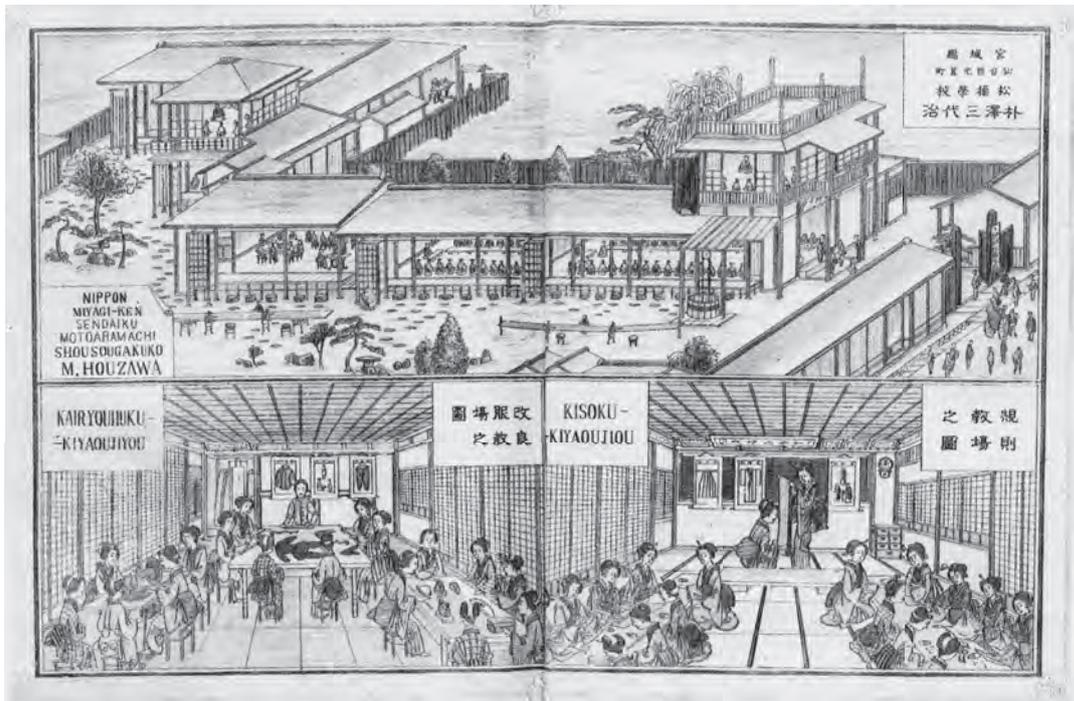


図5 『小学裁縫教授書』折り込み図

年(1858)生まれの若村は、明治5年(1872)10月から明治8年(1875)8月まで英国人のもとで洋裁を学び、東京印刷局洋裁伝習科などで洋裁教師を務めていた。

『壺』『全』の2冊には、折り込み図「松操学校之図」(図1参照)がある。上部の褒状をみると、左は明治13年(1880)宮城県博覧会に、中央は明治14年(1881)第二回内国勸業博覧会に裁縫掛図等を出品した時の褒状である。右は明治16年(1883)に教育者としての功績が認められ三等賞を文部省から授与された褒状である。なお、『小学』には「松操学校之図」はない。

次に本文をみると、3冊の『裁縫教授書』には大きな違いがあり、『全』と『小学』には23頁が2枚(便宜上23頁①、23頁②とする)あることである。なお、この3冊は左右見開きで1頁分になっている。つまり、『全』『小学』の22頁左半分と23頁①の右半分の部分が、『壺』では欠落している。語句の違いをみると、15頁では『壺』の「四方を縫ひ合す」が『全』『小学』では「四方の縁を縫ふ」に変わり、21頁では『壺』の「是を二ツに折り夫より釧先を裁つ」が『全』『小学』では「是を二ツに折りおくみ釧先を裁つ」に変更されている。いずれも、『全』『小学』の記述のほうが具体的で分かりやすい。

また、「小学裁縫教授書卷之一」の文字が『壺』では左右両側にあり、『全』『小学』では中央にある。

『裁縫教授書壺』の「壺」は、続編である「式」の出版を予定した書名と思われるが、管見のところ「式」に相当する三代治の著書は未見である。一方、『裁縫教授書全』の「全」は「全」頁が揃った完「全」なものという意味を込めたと推察される。『壺』の改定版が『全』であり、さらに、海外向けの図を挿入した書が『小学』である。『壺』『小学』の最後には北は北海道函館から南は大阪まで全国の売捌書林48店の一覧表が掲載されている。『全』の本文最終頁には「小学中等裁縫教授書」とあるが、『壺』『小学』の本文最終頁には「小学中等裁縫教授書」の文字に続いて「卷之一終」とある。

以上の相違点を考慮すると次のように推察で

きる。『壺』が最初に出版されたが、頁の欠落を発見して、欠頁を補いかつ若干の手直しを加えて『全』が改訂版として出版された。その後、ニューヨークの教育博覧会へ出品することが決まり、ローマ字説明文付きの折り込み図を新たに入れて『小学』が製本された。『小学』では、本文は『全』を使い、『全』では省いた売り捌き書店の一覧表と「卷之一終」を復活させ、著書の販売網の広がりと続編を暗示する構成になっている。

『初代校長朴澤三代治先生小傳』の年譜、明治17年の欄に「著裁縫教授書ヲ文部省ニ於テ検定シ小学校裁縫教科書ニ採用セラル」²¹⁾とある。上記3冊のなかのいずれの本が採用されたかは記していないが、朴澤三代治執筆の『裁縫教授書』が文部省検定を通るに値する内容であったことは紛れもない事実である。

7. 大内源太右衛門と「織物標本」

三代治の3冊の『裁縫教授書』の「出版人」である大内源太右衛門(1847～1909)は、仙台大町に店を構える呉服商であった。明治維新後、士族の払い物を買ひ、それを売り歩いて財を成し、店舗を増設したといわれている。大内源太右衛門は孤児を引き取って養育するなど福祉事業に尽力し、また、「楽善叢誌」を発行して有益な古書の再刊に努める出版人でもあった²²⁾。

大内源太右衛門の裁縫教育におけるもう一つの功績は「織物標本」の作製である。「織物標本」は、明治23年(1890)の第三回内国勸業博覧会で「分類宜シキヲ得授業上ニ便益ヲ与フルコト尠少ナラス」²³⁾の理由で、褒賞を授与されている。三代治の『裁縫教授書』には「木綿織地名称図」掛図の挿絵がある。「織物標本」の実物が確認されていないので、朴澤三代治の「掛図」と大内源太右衛門の「標本」を比較することはできない。しかし、明治28年(1895)に大内源太右衛門はこの標本の説明書として『小学裁縫科用織物標本説明書完』(以下、『説明書』と略す)を出版しているので、この『説明書』から「織物標本」の構成が木綿48種、絹48種、毛織物15種、麻織物15種、交織15種である

ことがわかる。『説明書』には各々の布の「組織」、
「給用」(用途)、「産地」が記されている。標本
を「小学裁縫科用」とした理由について、『説
明書』によると、織物の名称が地方によって様々
に呼称されて混乱を生じているので、学校で教
えることによって名称が統一されることを意図
したとある。宮城県の公文書「自明治四十二年
至大正三年女子師範学校書類」には大正2年
(1913)に仙台市が女子師範学校附属小学校に
寄付した書物一覧があり『説明書』も含まれて
いる。

8. 公文書からみた朴澤三代治の評価

「仙台市指定有形文化財」に指定された朴沢
学園裁縫教育資料 557 点のうち、352 点が掛図
類(掛図 351 点、掛図収納用木箱 1 点)である。
朴沢学園裁縫教育資料は数の上からは掛図に特
徴があるといえる。

明治 13 年(1880)の宮城県博覧会出品目録
のなかには「織物名付掛物」「裁縫図等掛軸」
と並び「振袖雛形」があり、掛図を意味する「掛
物」「掛軸」と「雛形」がみられる。明治 14 年
(1881)開催の第二回内国勸業博覧会出品目録
には「裁縫科用掛図」²⁴⁾がある。この博覧会
の時に授与された褒状には「衣服各部ノ名称縫
方寸法ノ比例裁断ノ方法等ヲ示ス」とあり、掛
図の内容を知ることができる。明治 23 年(1890)
第三回内国勸業博覧会には、前述のように雛形
が貼付された掛図が出品されている。しかし、
「第三回内国勸業博覧会褒賞証」には「裁縫教
授雛形 本品ハ裁縫教授上頗ル便益アルヲ觀
ル」²⁵⁾とあり、出品物の形態ではなく、内容
を重視した記述になっている。明治 27 年(1894)
に朴澤三代治は藍綬褒章を授与された。その関
係文書の一つである明治 27 年 5 月 4 日付で文
部大臣井上毅が内閣賞勳局総裁侯爵西園寺公望
に提出した文書には、推薦理由として、裁縫科
は教授法が難しい教科であるが、朴澤三代治は
裁縫教授上の一新機軸を出し、多数の生徒を一
同に集めて、実物ではなく模型を使って生徒に
理解させ、他教科同様の効果をあげた²⁶⁾、と
記されてはいるが、掛図についての記述はない。
翌 5 日の藍綬褒章の裁可を仰ぐ奏上文書で

は「実物ニ頼ラス模型ヲ以テ一齊ニ伝習スルノ
一新法ヲ按出」²⁷⁾とあり、4 日の文書にはない
「其他裁縫教授書及び掛図ヲ著作スル」²⁸⁾が追
加され、掛図については最後に記されている。
どちらの文書も三代治の優れた教授法の筆頭に
「模型」すなわち雛形を挙げている。三代治が
死去したのは、明治 28 年(1895)11 月である。
上記 2 つの文書は三代治の生存中の評価であ
り、当時において最も権威ある公的評価であっ
た。

IV まとめ

藍綬褒章の推薦文のなかで、三代治の「一新
法」「一新機軸」と評価された教授法は「模型」
つまり雛形であった。その雛形見本を一斉授業
に適した教材にするための更なる工夫が、雛形
を台紙に張り、掛図形式で示すことであった。
また、三代治は掛図を教室での教具としての役
割にとどめなかった。そこに三代治の独創性が
みられる。三代治は生徒の作品や自分の教授法
の評価を学校の外に積極的に求め、宮城県博覧
会、東京で開催された内国勸業博覧会、そして
ニューヨークの教育博覧会にも出品した。三代
治編纂とされる掛図には、小さな文字での記入
が多数みられ、大きな会場での展示物としては
地味である。出品物を掛図にしたのは、博覧会
での視角効果を意図したというよりは、運搬に
適した大きさと重量、簡便かつ安全な梱包にす
るための同一規格、展示に手間がかからないこ
と等を考慮したためであろう。

三代治は学校経営者として、当時、最大のマ
スコミ媒体であった新聞を有効に利用し、生徒
募集は言うまでもなく、卒業生の名前を新聞に
掲載している。三代治は博覧会での受賞記事が
学校を宣伝する絶好の機会となることを熟知し、
博覧会で好成績を得ることで、松操学校の
社会的評価を高めようと務めたのであろう。

三代治は厚紙の台紙に雛形の実物を貼付し
て、説明や記号は手書きする方法で掛図を作製
している。「仙台市指定有形文化財」の「指定
対象一覧」のなかで、掛図は 22 種に分類され
ている。そのなかで印刷物としての掛図は 3 種

にすぎず、他はすべて学園の教師による手製である点に、朴沢学園の掛図の特徴がある。

三代治から始まる掛図作製の伝統が、学園の歴史の中で確かに引き継がれてきた大きな証が、昭和11年(1936)から昭和17年(1942)の間に作製された「課題研究提出物」である。「課題研究提出物」は高等師範科生徒の卒業論文に相当し、各自がアルバムに課題研究をまとめている。アルバムには、雛形や図を貼付できる厚い紙質、展示と運搬の利便という掛図との共通点がみられる。筆者は平成23年(2011)に「課題研究提出物」を調査したが、古い作品では70年以上も経過しているにもかかわらず、保存状態は良好である。アルバムに貼付されている雛形は変色や虫食いも見られず、しかも、剥がれているものは極めて少数であった。このような技術が少なくとも戦前まで学園には継承されていた。

三代治の裁縫教授者としての功績は、掛図に矮小化されることなく雛形も含めた教授法全体から評価されるべきであり、また、掛図の役割を教具に限定することなく多角的にみるべきである。

謝辞

本稿執筆に際し、資料の閲覧等でお世話になりました朴沢学園事務局の齋藤敬様、田中慶子様には厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 三友晶子・太田八重美編(2010)重要有形民俗文化財指定10周年記念渡辺学園裁縫雛形コレクション。東京家政大学博物館：東京，4頁
- 2) 玉川大学教育博物館編(2006)掛図にみる教育の歴史。玉川大学教育博物館：東京，17頁
- 3) 吉良僕(1968)明治の視角文化と教育—掛図の変遷—。熊本大学教育学部紀要第16号：61頁
- 4) 常見育男(1959)家庭科教育史。光生館：東京，156頁
- 5) 関口富左(1980)女子教育における裁縫の教育史的研究—江戸明治両時代における裁縫教育を中心として—。家政教育社：東京，474頁
- 6) 樋口哲子(1970)わが国における被服教育発展の様相(第1報)明治期の裁縫教授法(1)。家政学雑誌，第21巻第7号：454頁
- 7) 同
- 8) 東京家政大学博物館(2001)渡辺学園裁縫雛形コレクション上巻。東京家政大学博物館：東京，3頁
- 9) 前掲6)456頁
- 10) 植村千枝(1976)家庭科教育における技能・技術(2)—初代朴沢三代治の裁縫教育とその周辺—。宮城教育大学紀要，第20巻：68頁—69頁参照
- 11) 平田宗史(1995)エム・エム・スコットの研究。風間書房：東京，149頁—150頁参照
- 12) 前掲3)59頁
- 13) 学校法人朴沢学園(2012)朴沢学園裁縫教育資料集第1集。41頁
- 14) 同14頁参照
- 15) 朴澤三代治(1884)小学裁縫教授書。楽善堂：仙台，4頁
- 16) 仙台市史編さん委員会(2008)仙台市史通史編6近代1。仙台市：仙台，333頁—334頁参照
- 17) 鈴木理郎(1996)朴沢学園女子教育111年の足跡。234頁—238頁参照
- 18) 宮城県教育委員会(1976)宮城県教育百年史第1巻。ぎょうせい：東京，170頁—173頁参照
- 19) 前掲11)152頁参照
- 20) 小林磯治編(1910)最新学校体操之理論及体操遊戯教授細目。平本健康堂：東京，4頁—5頁参照
- 21) 前掲13)所収『初代校長朴澤三代治先生小傳』8頁
- 22) 河北新報社(1982)宮城県百科事典，河北新報社：仙台，109頁参照
- 23) 大内源太右衛門(1895)小学裁縫科用織物標本説明書完。大内源太右衛門：仙台
- 24) 前掲13)41頁
- 25) 伊達宗弘編纂(2009)朴澤学園公文書資料集巻の十三・資料。丸善株式会社仙台支店：仙台，24頁
- 26) 同9頁—10頁参照
- 27) 同7頁—8頁
- 28) 同8頁

(2012年11月30日受付)
(2013年1月20日受理)